彙報

国際清史檔案研討会

岡田英弘

国際清史檔案研討会(International Symposium on Ch'ing Archival Collections Located in Taiwan)は、一九七八年七月二日から、台北市中山北路四段一号の円山大飯店(Grand Hotel)に、八個国、一七二名の参加者を集めて開かれた。日本からの出席者は堀直、細谷良夫、神田信夫、加藤直人、松村潤、宮脇淳子、岡田英弘、鈴木中正、矢沢利彦の九名である。

聞くところによると、このシンポジウムの発端は、台北の国立故宮博物院が精力的に刊行し続けている厖大な量の清代檔案――『年羹堯奏摺』、『宮中檔光緒朝奏摺』、『宮中檔康熙朝奏摺』、『宮中檔雍正朝奏摺』等――に興味を唆られたアメリカの研究者たちが、この故宮の刊行事業の資金を供給していたAmerican Council of Learned Societies に手紙を書いて、故宮の檔案を実地に見たいと申し入れたことからである。ACLS は、当時、故宮でその援助のもとに清代檔案の研究に従事していたYale 出身のMiss Beatrice S. Bartlett に照会し、Bartlett がオーガナイザーとして国立台湾大学文学院史学系教授の陳捷先を推薦した。それがこのシンポジウムの起源だった。当初の計画では小規模の四十人程度のもので、故宮博物院の一室を借りてささやかに開くつもりだったが、言い伝え聞き伝えて、参加者もスポンサーも多くなり、ついに大学会に発展してしまったのだという。

事実、発表された名簿では、主催が国立台湾大学、後援が国立中央研究院、国立中央図書館、国立故宮博物院、太平洋文化基金会、台北市政府、台湾省政府、United States Education Foundation in the Republic of China で、会長が国立台湾大学校長閻振興、名誉会長が国立故宮博物院長蔣復璁、国立中央研究院長銭思亮、台北市長李登輝、台湾省主席林洋港、東呉大学長端木愷(太平洋文化基金会総裁)、秘書長は国立台湾大学文学院長侯健、副秘書長は Beatrice S. Bartlett と陳捷先というにぎやかな顔振れで、オーガナイザーたちの苦心のほどがしのばれたし、出席者でもアメリカ人が四十九人と、外国人ではもっとも多かった。

七月二日(日)午後二時から、円山大飯店の麒麟庁のロビーでレジストレーションがはじまり、participant (paper readers と panel chairmen)は、この日から費用一切の事務局負担で、同庁の客室に宿泊することとなった。同夜は五

時半から南海路五十四号の Lincoln Center（美国教育処）において、U.S. Educational Foundation in the Republic of China（美国在華教育基金会）理事長 William Ayers 夫妻主催の招宴があった。

七月三日（月）九時から、円山大飯店麒麟庁二階大ホールにおいて開会式が行われ、会長閻振興が演説を行ったのに対し、岡田英弘が全出席者を代表して答辞を述べ、清代が中国史上はじめて人口が六千万台から四億台に達した時代であったことを指摘して、清代研究が今後の世界の人口問題の対策に寄与しうる可能性を説いた。

続いて特別全体会議に入り、容姿端麗な太平洋文化基金会会長李鍾桂女士の司会のもと、まず基調演説として監察委員蕭一山が登壇した。蕭一山は言うまでもなく『清代通史』の著者だが、名のみ高くして顔を見た人は少い。それでスター・アトラクションとして招いたわけだが、七十七歳という高齢にもかかわらず、顔のつやもよく髪も黒く、大きな声で清史研究の心得について長々と説き続けたのだが、内容は大したことはなく、あまつさえ訛りが強くて聞くのに骨が折れた。後で聞くと、翌日に心臓痲痺で急死したそうである。

さらに引き続いて各国における研究状況の報告に入り、次の七人が登壇した。

オーストラリア　Thomas Fisher（La Trobe 大学）
ドイツ　Erhard Rosner（Göttingen 大学）
日本　神田信夫（明治大学）
韓国　咸洪根（梨花女子大学）
　　辛勝夏（檀国大学）
ソ連　Eric Widmer（Brown 大学）
アメリカ　Susan Naquin（Pennsylvania 大学）

これで午前の部を終り、午餐はイースト・ウイングの中国餐庁において、閻振興会長の招待であった。

午後二時から三時までは、paper reading の第一回で、これ以後、毎日、A、B、Cの三つのパネルに分れて行われたが、岡田が実際に出席できたのはパネルCのみである。従って他のパネルがプログラム通りに実施されたか変更があったか、知るすべがないので、ここではほぼプログラムのまま紹介しておく。

Session One

A. Archival Materials for the Study of Ch'ing Local History

司会　Kent Smith（Connecticut College）

呂実強（国立中央研究院近代史研究所）

「簡介清季教務教案檔中有関地方政治与基層社会的史料」

Susan Naquin

"Sources for Ch'ing local history in the archives of the National Palace Museum."
Robert Weiss (Washington 大学)
"Archival material for the study of provincial government: The case of Hunan in the 19th century."

B. Economic Studies
司会　侯継明 (Colgate 大学)
Albert Feuerwerker (Michigan 大学)
"Some problems in studying the economic history of the Ch'ing dynasty."
王業鍵 (Kent State 大学)
"The grain-price reporting system in the Ch'ing period."
孫子和 (中国文化学院)
「山陽賑案与清代刑制」

C. Frontier Studies I: The Late Ch'ing
司会　岡田英弘 (東京外国語大学)
堀直 (日本学術振興会)
"A document on the Ch'ing government of Uighuristan."
Paul Hyer (Brigham Young 大学)
"Inner Mongolian rebels in the late Ch'ing period—Another interpretation."
趙中孚 (国立中央研究院近代史研究所)
「近代史所度蔵清季外交檔案簡介」

堀のは東京大学東洋文化研究所大木文庫所蔵の『葉爾羌城荘里数回戸正賦各項冊』の内容を分析して、それが十九世紀中葉の状態を伝えることを明らかにした。ハイヤーのは清末の内モンゴルに起った「蒙匪」の乱と称されるものを集めて、実態は単純一様な民族主義闘争ではないことを指摘した。趙のは近代史研究所所蔵の檔案の概観である。

内輪話になるが、会議のはじまる前、Betsy Bartlett が岡田に言うには、「あなたに第一日の最初のパネルの司会をお願いするのはほかでもない。ペーパーは一人二十分を厳守しなければ、とてもプログラムを消化できないが、中国人の学者に司会を任せておいたのでは、礼儀正しすぎて人の話を打ち切りはしまい。だからあなたが手本を示して、それからの運営を楽にしてやってはくれまいか」という。「ははあ、『夷を以て華を制す (using barbarians to control Chinese)』だね。承知した」と言ったのが人気を呼んだ。ここに及んで岡田が容赦なく堀とハイヤーを二十分きっかりで打ち切ったのが、薬が利きすぎて、趙に指を立てて見せたら、たちまち言葉の途中でストップしてしまった。翌日、岡田がどうも失

礼しましたと言ったことから親しくなって、実は趙は鑛黄旗満洲の Irgen Gioro 氏で、同氏族には宋の徽宗皇帝の後胤という伝説があり、そのため辛亥革命以来、趙姓を名乗ったのだと聞かされた。閑話休題。

三時にバスに乗って、南港の中央研究院に行き、李光濤から明清檔案の、張偉仁から三法司檔案の、王聿均から近代史檔案の説明を受けた。明清檔案は昔の木造の倉庫から、新築のコンクリートの収蔵庫に移り、多数の若い人々が忙がしく整理に従事していた。

再びバスに乗って、南京東路二段五十三号の再保大楼で、中央研究院長錢思亮の招待で西式自助餐にあずかった。

七月四日（火）の午前はペーパー・リーディングの第二、第三セッションがあった。

Session Two

A. Materials for the Study of Taiwan History

司会　陳奇禄（行政院政務委員）

Michael H. Finegan (Chinese Cultural Center of New York)

"Research on society and economy in Ch'ing Fukien and Taiwan from the perspective of popular reference works and private papers."

William Speidel (Inter-University Language Program)、王世慶 (Committee for Taiwan Historical Studies, AAS)

"The acquisition and study of Taiwan historical documents in private hands."

Preston Torbert (Baker & Mackenzie)

"Brief comments on two official Japanese source materials: The Sotokufu Archives and Land Report Surveys."

B. Ch'ing Collectanea

司会　昌彼得（国立故宮博物院）

杜維運（香港中文大学）

"An important source for the study of Ch'ing historical research : The collections of poetry and miscellaneous prose by the Ch'ing dynasty intellectuals."

吳哲夫（国立故宮博物院）

「四庫全書館工作人員之選選与管理」

Jonathan Porter (New Mexico 大学)

"The social history of science in the Ch'ing period: A quantitative analysis of the *Ch'ou-jen chuan*."

何烈（中興大学）

「論清史稿及一九一三年以来清史的編纂」

C. Some Unusual Manchu and Chinese Materials in Japan

司会　陳捷先

松村潤（日本大学）

"The state of Manchu studies in Japan."

細谷良夫（弘前大学）

"The Bordered Red Banner Archives."

松村のペーパーは、本来前日のオープニング・セッションにおいて紹介されるはずの各国における研究状況の一部だったのだが、手違いと時間の不足によってここに回されたものである。松村はこれとは別に用意したペーパー Some fragments of Chinese memorials from the T'ien-ming era" のコピーをも配布した。これは『旧満洲檔』の「宙字檔」の用紙に使われた五片の漢文奏摺がヌルハチ時代のものであることを考証したものである。細谷のは東洋文庫所蔵の同檔案の紹介である。

Session Three

A. Research Materials for the Late Ch'ing

司会　Lloyd Eastman (Illinois 大学)

張朋園（台湾師範大学）、呉文星（同上）

「論時報、順天時報的史料性質及其利用」

Frank A. Lojewski (U. of Indiana at Kokomo)

"The Li Bursary of Soochow : Calligraphic and orthographic problems in clerical documents."

呉倫霓（香港中文大学）

"Selected materials in Hong Kong related to late Ch'ing China."

David Faure（香港中文大学）

"Neglected historical sources on the late Ch'ing and early Republican rural economy.

B. Early Ch'ing Intellectual History

司会　王曾才（国立台湾大学）

何佑森（国立台湾大学）

「清代漢宋之争平議」

Lynn Struve (Indiana 大学)

"The three Hsü Brothers and semi-official scholarly patronage in the K'ang-hsi period."

Andrew C.K. Hsieh (Grinnell College)

"The interpretations of Emperor Ch'ung-chen in the early Ch'ing."

C. Manchu Customs and Legends

司会　Paul Hyer

張葳（国立故宮博物院）
「満人的習俗」
広蘇美琳（国立故宮博物院）
「聖女淑花伝」

張のは、満洲人独得の習俗は、中国征服後に形成されたものが多いことを論ずる。蘇美琳（Sumeilin）は新疆イリのシボ族の出身で、満洲のネイティヴ・スピーカーとして名高い故広禄（Guwanglu）立法委員の未亡人。そのペーパーは満洲語で読まれたが、同治の回乱に際して、夫人の母方の祖父の新婚早々の妻 Suhūwa を回王に与えてシボ族が殺戮を免れた故事を綴ったものである。

中食には、バスで愛国西路十六号の自由之家（Liberty House）に行き、そこで国立中央図書館長王振鵠の招待を受け、そのあと徒歩で植物園を横切って、台湾巡撫衙門を見てから、中央図書館に至り、清史資料の展示と善本書閲覧室を見た。同夜は自由時間であったが、日本人一行は、哈勘楚倫（台湾師範大学）・林孟真（国立中央図書館）夫妻の招待を受けて、林森南路一号の長城蒙古烤肉餐庁において、李符桐（台湾師範大学）・胡格金台（国民大会代表）らと一夕の歓をつくした。

七月五日（水）も午前はペーパー・リーディングであった。

Session Four
A. Archival Materials at the National Palace Museum: Palace Memorials
司会　宋晞（中国文化学院）
魏白蒂（香港大学）
"The value and limitations of the Palace Archives for biographical research: The case of Juan Yüan (1764～1849)."
石漢椿（California State U. at Sacramento）
"The 1891 revolt in Jehol: A preliminary study and a discussion of its implications."
Stephen R. MacKinnon（Arizona State 大学）
"Unexpected harvest from Yüan Shih-k'ai's palace memorials and the Pei-yang Hsüeh-pao."
B. The Early Ch'ing and the World beyond China
司会　方豪（国立台湾大学）
矢沢利彦（埼玉大学）
"Chinese documents on the Rites Controversy found in European archives."
楊意竜（香港大学）
"Science and religion: The K'ang-hsi Emperor

and Christianity."

劉家駒（国立故宮博物院）

「金国与朝鮮之建交与開市」

黄元九（延世大学校）

"Intellectual Exchanges between Korean and Chinese scholars in the late Eighteenth, and the early Nineteenth, Century"

C. Frontier Studies II: Early Ch'ing

司会　王家倹（台湾師範大学）

呂士朋（東海大学）

「清代的理藩院」

楊合義（政治大学）

「吉林船廠考」

宮脇淳子（大阪大学）

"The Khalkha Mongols in the seventeenth century."

呂のは清の辺境政策の論評で、対モンゴル、対チベットは満州人と共通の文化要素があったために成功したが、対回部は失敗したとする。楊のは、吉林が一名船廠と呼ばれるのは、順治十五年（一六五八）ロシアを討つためにここで四十四隻の戦船を建造してからであることを考証する。宮脇は、一六三六年の清朝の内モンゴル征服から、一六八八年のガルダンの外モンゴル侵入までの半世紀間、外モンゴルはジェブツンダンバを精神的首長とする統一体であったとする通説を批判し、ジェブツンダンバを戴いたのは左翼のトゥシエト・ハーン、ツェツェン・ハーンのみであって、もともと清朝に接近し、右翼のジャサクト・ハーンはオイラトと結んで独立を志向していたことを明かにした。

Session Five

A. Archival Materials at the National Palace Museum: Record Books

司会　蔣復璁（国立故宮博物院）

呉秀良（Boston College）

"The Imperial *Diary* under the Ch'ing."

荘吉発（国立故宮博物院）

「清代上諭檔的史料価値」

Beatrice S. Bartlett（Yale 大学）

"Understanding the Grand Council information processing system as a background to using the archives of the National Palace Museum."

B. Chinese Resistance to Manchu Rule during the Ch'ing

司会　李定一（政治大学）

謝浩（台北市文献委員会）

「試為明清史料中的慈煥太子案 釈疑——兼論本案的政治影響与南京抗清的直接関連」

Thomas Fisher

"Politics and persecution: Literary inquisition in the Yung-cheng reign."

胡健国（国史館）

「軍権転移与清末満漢政治勢力之消長」

其冰峯（Center for Chinese Research Materials）・余秉権

「江南籌防費用——清末長江下游籌防駐軍報銷清冊之研究」

C. Manchu Materials from the Early Ch'ing

司会 Denis Sinor（Indiana 大学）

岡田英弘（東京外国語大学）

"Outer Mongolia through the eyes of Emperor K'ang-hsi."

神田信夫（明治大学）

"Ming and Ch'ing documents now lost."

陳捷先（国立台湾大学）

"The origin and value of the *Man-chou Shih-lu* (Manchu Veritable Records)."

岡田は『宮中檔康熙朝奏摺』第八・九冊に刊行された康熙三十五年（一六九六）の外モンゴル親征当時の皇太子との間の親書を通じて聖祖の心情を描いた。神田は架蔵のアルバムに面影を留める明末清初の文書を紹介した。陳の『満洲実録』の編纂の経緯についての説は、松村潤が批評するはずであるから、それに譲る。

中食は林森北路の功夫茶館でとり、バスで士林の故宮博物院に至り、史料の展示を見たのち、別棟の餐庁で招宴があった。蔣復璁院長は挨拶の後、蔣緯国の宴会に行くべく退場し、昌彼得図書文献処長が代って主宰した。

七月六日（木）、朝食ののち、円山大飯店をチェック・アウトして、バスで板橋鎮の林家花園に至り、当主の林衡道（淡江学院）から説明を受けたのち、パネルに分れて最後のペーパー・リーディングを行った。なお、遅れて到着した人々のために、パネルDが追加されたが、記録がないのでそのプログラムは省略する。

Session Six

A. The Study of Taiwan History

司会 李国祁（台湾師範大学）

方豪（国立台湾大学）

「台湾採用『箕斗』之史的探討」

黄典権（成功大学）

「斐亭詩鐘原件的史料価値」

曾廼碩（中国文化学院）
「釈『福建台湾省』制」

B. The Reception of Western Ideas in Nineteenth Century China

司会　閻沁恒（政治大学）

Fred Drake（Massachusetts 大学）
"A literature of intrusion: Protestant secular materials on the eve of Opium War."

Erhard Rosner
"China's early reception of the Western law of nations."

Corinna Hana（Göttingen 大学）
"Aspects of the reception of Western international law in China."

C. The Manchu Language

司会　神田信夫

Stephen W. Durrant（Brigham Young 大学）
"The controversy among Western Sinologists regarding the utility of Sino-Manchu translations."

崔鶴根（ソウル大学）
"On the imperfect-past ending *-fi*, *-mpi*, *-pi* in the written Manchu language."

胡格金台
「黒竜江名称来源故事満語講述」

デュラントは、イエズス会士ら初期のシナ学者がいかに満洲語訳の価値を誇張したか、その反動として、満洲語学習がいかに軽んぜられるようになったかを説いた。崔は『語学研究』十一巻二号に載った論文のサマリーを読んだが、岡田が『旧満洲檔』の綴字法から見て、-fi は本来 -pi であったのではないかと質問したのを、崔は拒否した。胡格金台（Kögjiltei）はダウル人、有名な Merse の弟子で、ダウル人の唯一の書写語である満洲語を用いて、黒竜江の名称の起源と、夏季、降雹の際に菜刀を園中に投げる習俗の起源伝説を語った。

中食にはバスで台北市中華路の中山堂（台北市政府）に赴き、新任の台北市長李登輝の挨拶を聞き、西式自助餐のもてなしを受けた。

これで国際清史檔案研討会の公式の行事はすべて終ったはずであったが、なにしろ中国式の学会のことと、そうそう容易に放免してはくれない。外国からの参加者と事務局の主要な人員四十余名は、中山堂からバスに乗って、南部旅行に出発した。途中、慈湖で故蔣介石総統の遺骸に敬意を表した後、暗くなってから鹿港の町に到着、貴族院議員辜顕栄の旧

邸が歴史博物館になっているのを見学、近くの餐庁で鹿港鎮長の歓迎を受けて晩餐をとり、深夜に台中に至って市中のホテルに分宿した。

七月七日（金）は、林衡道の招待で、広東式の朝食ののち、台湾省文献委員会に至り、洪敏麟の説明を聞き、総督府文書を閲覧した。日本式の草体で書かれた文書を読める人が少くなることを見越して、漢訳と出版に全力を傾注しているとのことであった。さらに郊外の台湾省政府に至って、二階で英語による省政の現状のブリーフィングを聞くうちに、台北から台湾省主席林洋港（前台北市長）が到着、歓迎の辞を述べた。ついで台中にもどって、文献委員会の招待で台湾料理の中食をとった。

午後はバスで台南に向かい、新営鎮の台南県文献委員会を訪問し、学甲鎮の慈済宮（保生大帝廟）の構内にある県立歴史博物館において、財団法人学甲慈済宮董事長鄭帝の招待で夕食をとり、同夜は台南市中山路一〇〇号の東亜楼大飯店に泊った。

七月八日（土）は、岡田は前夜、中山路の夜市で陳捷先、杜維運やアメリカ人たちと痛飲して、生ビールと黄酒の乾杯責めにあい、一日床上で呻吟していたので詳しくは知らないが、一行は午前は安平古堡、億載金城、延平郡王祠、午後は大南門、碑林、文廟、赤嵌楼などを廻ったようである。同夜はホテルの三階で最後の晩餐があった。

七月九日（日）、バスで帰途につき、北港の天后宮に参拝ののち、近くで中食、台北に帰着するころは、すさまじいスコールが降って、連日の日照りつづきを解消した。円山大飯店に着いてみれば、大結婚式の最中で、キャデラックの波がホテルを取り巻いていた。

このシンポジウムは、冒頭に記したような事情で開かれるに至ったもので、このままの形で何回も繰り返して定期的に開かれるような性質のものではない。しかしこのシンポジウムは、清朝研究がいまや世界の中国学の主流となりつつある趨勢を明かに示したものである。あらゆる根本史料が完備していて、空理空論ぬきに中国の本質に迫りうるのは、清朝時代をおいてほかにないからである。

第十五回野尻湖クリルタイ

岡田英弘

一九七八年のクリルタイは、例年のごとく、七月十六日から十九日まで、野尻湖ホテルにおいて開かれた。参加者は次の六十七名である。